

# ヘルダーリンの後期の詩について —— 神的なるものと神々 ——

小林 繁吉<sup>†</sup>

## Hölderlins späte Gedichte —— Göttliche und Götter ——

Shigekichi KOBAYASHI<sup>†</sup>

### ABSTRACT

Hölderlin schrieb zwischen 1800 und 1803 späte Gedichte, die Oden, Elegien, einzelne Formen, die vaterländischen Gesänge und hymnische Entwürfe enthalten. Die relevanten späten Gedichte heißen : *Chiron, Brod und Wein, Der Archipelagus, Hälfte des Lebens, Am Quell der Donau, Versöhnender der du nimmergeglaubt...*, *Der Einzige, Patmos, Andenken, Der Ister, Mnemosyne, Deutscher Gesang, Wie Vögel langsam ziehn...*, *Die Titanen, Einst hab ich die Muse gefragt...*, *Wenn aber die Himmlischen...*

In diesem Aufsatz handelt es sich um Göttliche und Götter als Vermittler und Versöhnender zwischen sterblichen Menschen und unsterblichen Göttern und als Prophet und Offenbarender der Gottheit. Die oben erwähnten Göttlichen und Götter lauten : Fluss, Erde, Natur, Empedokles, Herakles, Bacchus ( Dionysos ) und Christus. Fluss, Erde, Natur und Empedokles gehören zu den Göttlichen, Herakles gehört zu den Halbgöttern und Bacchus ( Dionysos ) und Christus gehören zu den Göttern. Hier charakterisiert Hölderlin die vier großen heroischen Gestalten. Empedokles wird z.B. Gotteslästerer genannt, Herakles Jäger, Bacchus Weingott und Christus Bettler. Dabei ist die Christusfigur in den späten Hymnen von Hölderlin ganz anders als die in der allgemeinen christlichen Religion.

**Key Words:** *Göttliche, Götter, Erde, Herakles, Christus*

キーワード : 神的なるもの, 神々, 大地, ヘラクレス, キリスト

### 序

ヘルダーリンは1800年から1803年にかけて、オーデ (Oden)、エレギー (Elegien)、個々のいろいろな詩型 (Einzelne Formen)、祖国の歌 (Die vaterländischen Gesänge)、讃歌草案 (Hymnische

Entwürfe) を含む後期の詩群 (Späte Gedichte) を書いた。<sup>1)</sup> これらの詩群の中での重要なテーマの一つは、神々の啓示、神性の告知、神々と人間 (人間を主とした死すべきものたち) との和解であり、もっとわかりやすく言えば、神々と人間との間を仲介するもの、融和するものたちのあり方 (存在) であった。この論文では、1800年から1803年にかけて制作されたと考えられる一群の後期詩群のうち、特に後期讃歌 (Späte

平成 26 年 1 月 14 日受付

<sup>†</sup> 基礎教育研究センター・教授

Hymnen)に焦点を当てつつ、他の詩との連関を探りながら、<sup>2)</sup> 神々と人間の仲介者、和解者の役割を果たしたと考えられるヘルダーリンの詩的・神的世界の神性を啓示するものたち、神的なものたちと神々のいくつかを取り上げ、その神的世界構造の一端を提示してみたい。

論述の構成は以下になる。まず、神的なものの代表として〈川〉と〈大地・自然〉を取り上げる。次に、論述の都合上、例外的に1997年から1999年ごろにかけて書かれ未完に終わった「エムペドクレスの死」を取り扱い、神的なものに属し、神々の系譜に連なる前駆者としての〈エムペドクレス〉に論及する。<sup>3)</sup> そして次に、神々の啓示者たち、半神〈ヘラクレス〉について論述し、その後で神々の一員（一柱）と見なされる〈バックス（ディオニュソス）〉と〈キリスト〉について論じる。ここでの論述の主要テーマは、ヘルダーリンの1800年から1803年にかけての後期詩群における神々の啓示を担う神々と人間の仲介者、融和者である神的なものと神々の性格・役割とそれぞれの間の関係である。このことを考究することによって、ヘルダーリン独自の詩想に寄り添ったヘルダーリン特有の詩的・神的世界構造構想の一端を示し、その解明への一助を目指すことが可能になるものと考えている。それでは各テーマごとに以下で論じていく。

## 1. 川 <sup>4)</sup>

太陽と月、あるいは日中と夜を川が結びつけているというのは、大河は川としては長大なので、川の流れの一方に太陽があり日中で、他方に月が出ていて夜ということはある。太陽と月、日（日中）と夜はつながっていて、川は水の流れという常に動きのある活性化した状態で、正反対の性質のもの（太陽と月または日と夜）を結びつけ、つなぎとめ、通常ならば一方が成り立てば一方が成り立たない矛盾した存在を難なく自然に和解させ結びつけている。それはまた高いところから低いところへ一方通行的

に水の勢いである流れとして向かっているのであり、単純な姿をしながら相反するものをつないでいる（つなぐ役割をしている）神的なものの一つである。高みからやって来て低みに達するということは神々の栄光を下界にもたらしことでもある。神々あるいは神的なもののいる天上、天空に近い高い山の上から山の下、平野、大地を通り、最後に大海に流れ出て、川は一応の完成を見る。<sup>5)</sup> このように川には神側面がある。

大洋に注ぐ川は確かに川の役割を完結し、その時点で源泉も川の本来の意味も忘却してしまうかもしれない。だがその一方で、今度は大洋の方が自らの、世界に在る意味を考えはじめ、大洋自体の役割について考えを巡らし、大洋に注ぐ川のことを思い出し、その源泉にまで考えが及ぶことになる。つまり、大洋に注ぎ込んで大海の水になったからといって水はすべて同じというわけではなく海の水自体にも記憶（追憶）があり、<sup>6)</sup> 空から降ってきた雨の水や、山の源泉としての水、平野部や町や都市を流れた際の水の記憶はある。切っ掛けさえあれば、海洋の水もそれらのことを思い起こし、川のことを思い出し、源泉のことも想起することになる。<sup>7)</sup>

## 2. 大地・自然

ヘルダーリン詩に表れる大地や自然は、ギリシア神話のガイアを想起させ、太母（大いなる母）であり、大地（自然）の中で、あるいは上で起こりうるすべてを最終的には肯定的にとらえる、存在の根幹となっているものであり、本質的に神的なもの、神聖な存在と言える。ある意味神々（神）やすべての存在物の始まりと終わりと生の奇跡（生涯）、存在の持続のすべてを担っているものとも言える。だがヘルダーリン詩においては、神々不在のときは不毛の大地不毛の自然となり、神々が到来し近在すれば肥沃の大地豊饒の自然となり、実り豊かな世界が現出することになり、神々の在不在が大地あるいは自然の神の輝きを決定している。しかし

これには太古よりの本質的で秘儀的な理由がある。それは神々さえも従わねばならない世界の原理とつながっているものであり、それが大地や自然が神的なるものとなっている理由である。

大地と自然をひとまとめにして〈大自然〉と呼ぶことにすると、〈大自然〉は本来は原初の神とも言えるものなので、自らの力で神的輝きを発することができるし、神的光を闇に変えることもできたはずである。しかし、ギリシア神話のガイアの創世記の話に見られるように、ガイアから巨神が生まれ、巨人が発生し、神々が生れ出、人間が出現し、神的なるものも生じ、世界は動植物や、いわゆる山や川、泉<sup>8)</sup>や海、都市や鉱物や大気や様々なもの、ニンフやサチュロスなど神話上の生き物や存在物であふれるようになった。それを一番奥底、根底で保証しているのは〈大自然〉である。——ある意味地下世界、ハデスの冥界を保証しているのも〈大自然〉である。——この太母である〈大自然〉はこのような世界が出現したことを喜び、つまり、結論だけを言えば、世界が存在で満ちていることを肯定的にとらえ、〈大自然〉の内で繰り広げられるパノラマや人生模様、数々の物語の大舞台となることに自ら甘んじることに決めたのである。この原初の太母〈大自然〉の決然とした態度は、神々の決意を越えるほどの一大決心だったと言える。〈大自然〉は、それゆえ大舞台上で起こることに直接は干渉しないことにしたのである。ただの傍観者というわけでは決してない。喜びをともに喜び、苦しみをともに苦しみ、悲しみをともに悲しみ、栄枯盛衰、生起するすべての出来事を肌で感じつつも、とにかく直接的には力を加えないことにしたのである。神々や巨神が幼く若いころはいろいろ力を貸したり、干渉することもあったのだが、すべての存在が遠い子孫となった今、〈大自然〉は神々が近在すれば神的なるものになり、神々が不在になれば闇の世界をもたらしものとなったのである。したがって〈大自然〉は本来神々の一員であったのが、神々の一族ではない神的なるものになったのである。このように本質的部分

が神々である神的なるもの（すなわち神々が不在のときは神的なるものにはなりえないとされている存在）としてありつづけるようになったのであり、そういう意味で〈大自然〉は神々の中の特別な存在であり、また神的なるものの中の特殊な存在者とも言える。

唯一〈大自然〉が特別なものであることの片鱗を見せるときがあるとすれば、神不在のときでも〈大自然〉は確として存在しつづけていることであり、不毛の大地や砂漠<sup>9)</sup>のような存在物の土台となる存在者（不滅の存在）としてありつづけているのであり、このことから〈大自然〉は特別な神々（神）であり、神々に連なるものである。

〈大自然〉に関わらない存在を無理に挙げれば、星や天体、天空にあるものたちであろうか。しかしながら、この天上にあるものたちも〈大自然〉がなければ、すなわち天上界のみが唯一の世界となれば、非常に住みにくいところになり、その存在自体が危うくなる可能性がある。神々を神々と思ってくれるものたちが一切いなくなってしまうからである。神々は神々という特別優れた存在ではなく、ただの存在者一般という位置づけになり、神々としての価値はほとんど失せてしまう。

さて、このような〈大自然〉という大舞台の上で、神々、神的なるもの、ニンフ、サチュロス、動物、植物、鉱物、神話上のその他の生き物、そして、人間、巨神、巨人、海、川、山、泉、野、都市、林、森、魚、虫、火や水、ありとあらゆるものが神的光に満ちて栄え、やがて衰え、滅亡したりもするのである。通常は〈大自然〉で春夏秋冬が循環するように、再生が繰り返され、世界は〈大自然〉のうちで成長し、繁栄し、衰え、やがて死を迎え、消滅し、そしてまた再生し、それを繰り返していく。生成と消滅という正反対のものを内包している〈大自然〉は誠実なる持続（それこそ〈愛〉かもしれない）によってそれを成し遂げている最終的に肯定的存在である。

神的なるものたちは、神々が近在したり、

神々の光を直接受けてもそれに耐えうる、または浴びてもよいように充分な準備ができてい  
る存在者であり、神々がそばにいないときでも、  
わずかな神の光を自らが持ちつづけている存在  
である。自然の中で最も大きい存在の一つは大  
地である。大地は、あるいは自然は、本来的に  
自らが神々（神々に等しい存在と言っても差し  
支えない）であるから、自ら光を発することが  
できるのであるが、自らそれを封印して、自ら  
光を発することができないもの（神的なるもの）  
に変化したと考えてよい。すなわち、〈神的  
なるもの〉は自ら光を発することはできない  
のであるが、言い換えると、光をつくり出すこ  
とはできないのであるが、光を持ちつづけるこ  
とができる存在なのである。ただし、神々の到  
来と近在がない場合は、通常弱い光しか保持で  
きない。それゆえに、神的なるものたちは、神  
不在のときは乏しい光あるいは弱い光を発する  
ものたちとなる。神的なるものたちの多くは、  
この弱々しい光によって、かえって真の光の存  
在者神々の存在を想起させ、神性を告知する預  
言者としての性格をもつ。<sup>10)</sup>

神的なるものたちではない死すべき身のもの、  
たとえば人間は神々近在の際の強く激しい光に  
は耐えられない存在である。したがって、人間  
たちは、神的なるものたちの導きによる弱い光  
に慣れつつ、神々の到来と現存の際、神的なる  
ものたちの仲介者としての役割と存在を通して  
間接的に神々の光（この場合は中程度の強さの  
人間に対して適度の光ということになる）の恩  
恵を受けることになる。

日の神アポロンに象徴される強く激しい光に  
耐えられない死すべき身のものたちは、神的な  
るものを通してペールを通して間接的に神の光  
を受け感ずることができる。神的なるものたち  
は神々から発する強い光を直接受け入れること  
ができる。死すべき身のものたち、特に人間た  
ちは、神々不在のときは、神的なるものたちか  
ら発する弱い光に慣れ弱い光を浴び、神々が到  
来し神々が現存するときは、間接的に神的なる  
ものたちを通しての中程度の（人間にとって適

度な強さの）光を浴びることがようやくできる  
ようになる。<sup>11)</sup>

### 3. エムペドクレス

エムペドクレスは人間であり、神々の恩寵を  
受けたとても優れた人間であったが、短慮にも  
性急に人間たちに神々の啓示をするために自ら  
を神々の仲介者、預言者と言わないで、自らが  
神の使いであることを伝えずに、短い間ではあ  
るが自らが神（神々）であると言ってしまった。  
古典ギリシアの時代、神話や伝説の時代、太古  
のときには、大抵の場合、言葉は実体となって  
自らに返ってくる。すなわち、エムペドクレス  
は人間たちに端的に神々からの光の到来（ヘル  
ダーリンの作品中のエムペドクレスの生きた時  
代も神々の光の乏しい時代である。）を告げた  
かったために、自らの分を越えて自らが神であ  
ると口に出してしまったのであり、これこそが  
ヒュブリス<sup>12)</sup>、瀆神の大罪であり、この罪のため  
にエムペドクレスはエトナ山の火口に身を投げ  
入れなければならなかったのである。<sup>13)</sup>

エムペドクレスはその最期に際して大地・自然  
の深奥に身を投げ入れる行為によって、自然最  
大の神的なるもの、あるいは自然最高の神々の  
告知者、預言者である大地の真の意味、啓示者  
としての性格を明確に示すことができたのであ  
る。同時に大地・自然の奥底に下って行くこと  
によって神々と人間の最良の仲介者と一つにな  
ることができたのである。エムペドクレスの現世  
での最大の仕事は神々の到来を預言することだ  
ったのであるから、彼の死によって大地・自然の  
秘儀を大いに知らしめることができ、またエム  
ペドクレス自身も自身の一度の死によって、大  
地・自然の中で、半永久的に神々の到来を告げる  
神々と人間との間の仲介者、預言者となりえた  
のである。<sup>14)</sup>

### 4. ヘラクレス

本来的に生身の人間であるエムペドクレスや、

神々の一員（一柱）バッカスそしてキリストと異なり、ヘラクレスは半神（半神半人）という性質を持っている。そしてこれが神々の啓示者、神性の告知者としての神々と人間の他の仲介者、融和者、預言者と本質的に異なっているところである。ヘラクレスの性格は神々の部分と人間の部分の両方がヘラクレス自身を分裂させていて、神々の部分は天上界、神々の世界を志向し、人間の部分は大地、自然の上に立ち活動することに彼を駆り立てる。しかしこの性格が人間と神々を最もよく融和し、仲介し、神々の啓示を最高度に発揮する英雄の一人となることを可能にしたのである。

ヘルダーリン詩の神的世界を離れて、一般に流通しているギリシア神話の中では、ヘラクレスは神々と巨神（ギガンテス）との戦いにおいて超人的な働きをし、戦況が不利な神々の側を勝利に導き、死後は父ゼウスによって神々の一員の座を占めることになっている。本来のギリシア神話の世界において、ヘラクレスは半神として誕生し、最終的には神々の一員になるわけであり、半神と言うべきか神（神々）というべきか明確に決められないところがある。しかしながら、ヘラクレスにまつわる物語・神話のほとんどが半神としての性格を持って活動していると考えて差し支えないので、半神ヘラクレスと呼ぶ方がふさわしいと言える。

さて、ヘルダーリン詩の神話世界におけるヘラクレスはどのような性格、行いをもってあらわれているのであろうか。結論を言えば、やはり、ここでも半神ヘラクレスと呼ぶのがふさわしいあらわれ方をしている。半神ヘラクレスは神々の啓示を行うために（神話上の）世界を放浪して歩く。彼（ヘラクレス）の存在そのものがヘルダーリンの詩的世界においては神性の光のあり方の象徴となっている。〈清める者ヘラクレス〉<sup>15</sup>は一般に流通しているギリシア神話では第五の難事〈アウゲイアスの家畜小屋〉の掃除を指していると言われているが、ここではもっと本質的なことが隠されている。ヘルダーリン詩においてヘラクレスの生きている神話世界

も現世（現代）と同様（神々の）光の乏しい時代であり、光の乏しい時代の中では人間たちにとって弱い光でさえもまぶしいくらいなのである。したがって、この暗い時代の弱い光に徐々に慣れていくことによって、神々が到来し近在したときの（神々からの）激しく強い光を〈神的なるもの〉を通して中程度の、人間の眼にとって適度な光として受け取ることができるようになる。このように、人間たちは神々からの光の受け入れの準備をし、訓練をし、神的光に徐々に慣れていかねばならない状況に陥っているのである。この状況下で、ヘラクレスは、ヘラクレス自身が半神という生まれなので、自身のうちに光の部分の有しており、この光で（神的光の）乏しい時代に光を広め、人間たちに神的光に親しみさせ、慣れさせる役割を果たすために旅に出ることになる。ゆえにヘラクレスは光で闇を狩る〈狩人〉<sup>16</sup>なのである。

ヘルダーリンの詩的・神的世界において、ヘラクレスの12の難事<sup>17</sup>の解決そのものが暗い時代に光をもたらすことになる。半神半人であるヘラクレスは、神々と人間の間に立って、苦悩しながら、一つひとつ自分に降りかかり起こってくる課題と向き合い、それを片付けていくことによって、地上の人間世界から天上の神々の世界へ歩を進めていく。ヘラクレスの生誕に起因するゼウスの妻ヘラの執拗ないやがらせ、妨害、暗殺者の派遣はすべて、見方を変えたと、現世（死すべき身のものたちのいる世界）におけるヘラクレスの人間界を変える能力に期待するところがあることから生じていると考えることも可能である。天上の神々からの神的光を、ヘラクレスを通してわずかずつ（光の乏しい）人間界に広めていき、やがて人間たちが弱い光に慣れ、少し強い中程度の神的光に耐えられるようになったときに、人間界に神々が到来し、人間たちと神々が和解する。人間世界に一つひとつ神々の光を照らし、汚れた部分を神的光で清めつつ、清める者としてヘラクレスは、神々の降臨に際しても、人間たちをその光を受け入れ耐えられるように訓育し、人間界を神々の世界と



接点を持てるように整え、それによって神々の啓示をなすものとなったのである。こうしてヘラクレスはエムペドクレスやバックスやキリストの系統に連なるものとなったのであり、また、半神として生きたのが神々の啓示を行った期間だったので、人間エムペドクレスと、神々であるバックスやキリストとの中間に位置し、人間と神々両方の性質を持っているヘラクレスは、その存在自体が神々と人間の仲介者、和解者、融和者の性格を体現している。

人間の側面から見れば、ヘラクレスはその並外れた超人的能力で人間の力をはるかに越えた神々と対等以上に対峙できる技量と度量を持っていた。それでは、ヘルダーリンの詩的世界においてヘラクレスの存在自体はどのような意味を持っているのであろうか。この詩的神的世界においては、人間界も属する死すべき身のものたちの世界と神々の属する不老不死のものたちの世界とは完全に分離していて、しかも神的栄光にあふれている天上界は高貴で聖なる領域として上空に存在し、地上界は——地上界の下に神話上は地下の世界ハデスのタルタロスがあるのだが——生命に満ち溢れてはいるが、神々の側から見れば、雑多で汚れている領域、不浄な世界ということになる。このように、明確に天上界は天上界、地上界は地上界とまったく別の世界に分かれていた詩的神的世界には、ある種の静かな穏やかな棲み分けが微妙なバランスのもとで成り立っていたのである。すなわち、神々と人間との接点がほとんど断たれていたと言ってもよく、そのような世界状況、乏しい時代が現出していたと言える。このような状況下に出現したヘラクレスは、天上界にも属さず、人間界にも属さず、同時に天上界と関係を保ちつつ、人間界に自分の活動の拠点を置いて、彼に与えられた使命を成し遂げていったのである。ヘラクレスの特徴は、人間の力を超えた存在であると同時に、神々の指示や指令に従っているかのようでいて、神々の命令すら無視してしまうところにあったと言える。<sup>19)</sup>

端的に言うと、ヘラクレスは他の神々の啓示

者たちと異なり、分をわきまえない破天荒な男だったのである。この天界や地上の規則を無視し、軽々と越えてしまう男こそが、大いなる改革、革命を成し遂げてしまう。ヘラクレスが何故にヘルダーリンにとって重要な存在かと言えば、この掟破りの破天荒な性格を持つ神話上の英雄だったからであり、この英雄によって、神々の世界も死すべき身のものたちの世界、人間界も地下の世界さえも縦横に変革させられたからなのである。これにより、結果的に人間界は清められたのであり、この清めによって、ヘラクレスは汚れを一身にまとってしまったのであり、神話上の英雄として、そのあらゆる汚れ、汚泥によってヘラクレスは苦しみつつ死んでいかねばならなかった。<sup>19)</sup>

何かを行う場合、社会通念上の枠内で規則や法律に従って分をわきまえて常識的に事を行うのは、その作業や業務がかなり難しいものとしても、それを実行する本人には実はそれほど負担にならない場合が多い。それは当事者にはっきりそれとわかっていなくとも全体の制度なりシステムが大枠として存する場合は、その範囲内で何かを行うことは、かなり難儀なこととしても、何とかそれほどの汚れや傷を負わなくても成し遂げることができるものだからである。それは結局大枠で見れば、ある種のルーチンワークだからである。

しかし、ヘラクレスの12の難事や巨神（ギガンテス）との戦いやその他の出来事は、通常の枠を越えた枠外の出来事だったのであり、屈強の戦士ヘラクレスにとってもこのように常識外の活動の連続は、彼に数々の傷を負わせ汚れを増加させ、神話で述べられている通り、彼を毒まみれ血まみれにしてしまったのである。何か新しいこと、枠を破ることに挑戦するものは、このように多大の犠牲をはらわねばならないのであるが、このヘラクレスの犠牲的行動によって、それまでまったく別々の存在世界だった天上界と地上界を混乱させ、混合し、風穴を開け、地上界と天上界を錯綜させ、混沌に導いていったのであり、この混沌の中から、神々の側から

人間界に自ら入り込んでいこうとするバッカスやキリストが出現してくる素地をつくったのである。

一般的に通用している神話の時系列上では考えられもしない順序になるが、ヘルダーリンの詩想の中のヘラクレス像から立ちあらわれてくる神々の啓示者たちの系統は、エムペドクレス（人間としての仲介者）→ ヘラクレス（半神として神々と人間の世界の完全な分断に風穴を開けた変革者）→ バッカス（神々の世界の一員であるが人間に神々の秘密の一端を与え、人間と共存しながら神性の啓示をなした。）→ キリスト（神々の一員であるが、人間界で人間としての一生を終え、死後に再生することによって神々の啓示をなした。）というようになる。<sup>20)</sup>

## 5. バッカス（ディオニュソス）

ギリシア名のディオニュソスは、その誕生のときの母の死がイメージとしてつきまとっており、どちらかと言うとマイナスの感情が色濃く漂う神となっている。<sup>21)</sup>むしろローマ神話のバッカスという呼び名の方が、いくばくかでも酒の神、祝祭の神、エクスタシーの神、または異境の神という色彩をより強めているように見える。ヘルダーリン詩の中では、ディオニュソスという名ではなくバッカスの名で登場してくるのは、詩人ヘルダーリンがマイナスのイメージではなく、よりプラスイメージに近い神話上の神として詩的世界に登場させたかったと考えざるをえないのはうなずけるところがある。その神バッカスは同時に豊作・豊饒の神でありしばしば人間に変身して人間のもとに現れ、人間とともに行動すると言われている。

エムペドクレスや大地や自然が、神々到来の預言者である神的なるものであるならば、バッカスの姿はどういう扱いになるのであろうか。バッカスは完全な神々（神）の姿で描かれている。すなわち、神々の到来を告げる預言者なのではなく、自らが神（神々の中の一神）なので

ある。ただ、恐らく、バッカスと他の神々との決定的な違いは、バッカスは人間たちの眼前で、その神的な光の強さを調節できる特殊な才能を有している神だったということに尽きる。他の神々であれば、人間の前に直に現れるとしても、その存在の実相を何らかの形で和らげ、弱い光を発する者として—— 神的光に耐えられる人間がいる場合には、中程度の適度な強さの光を放射するものとして—— 出現し、人間との間接的な接触や関係を結ぶことになるのであるが、その本質の神々としての核心的部分は確固として保持しているために、人間は神々と対峙したとき、いやでもそのオーラ（神々自身から放たれる後光のようなもの）を認め感ぜざるをえない。神々との交渉を持つことはできても、そこには越えられない壁、絶対的な存在の亀裂、深淵があることが確かであり、人間も神々も無意識にであれ意識的にであれ、そのことは理解し感得している。つまり、目の前にいる神々（神）は人間を卓越した超越した絶対的な神々（神）であり、そのことを忘却したり神々（神）を冒瀆した場合は、人間の破滅が待っていることを恐怖し、全身全霊で神の到来を喜んではいるのであるが、同時に微かにそれに反発しているというアンビバレントな感情を有していることがほとんどの場合なのである。

それに対して、同じ神々の中の一神バッカス相手の場合は、通常の神々の顕現と完全に異なり、本当は紛れようもない神（神々）であるバッカスと—— アルコール（酒）の力を借りてきたという理由もあることは事実であるが—— 一体の感情を抱くことができる。<sup>22)</sup>本来はバッカスも自分を信仰しないものに対して厳しい神であり—— たとえば、アポロ神を誉め称えたオルペウスの災難と死を想起すればよい。<sup>23)</sup>—— 他の神々と異なることはないはずなのであるが、バッカスの一団に加わり、歌って踊って我を忘れ無我夢中になっているうちに、神々と人間の間の垣根、大いなる壁が取り払われてしまう。バッカスは、真の意味で、神々の側から人間の側に自らの身を降ろし、神々の秘儀の一部を人間

に知らせ与え——この部分でゼウスに反抗して人間に火を与えたプロメテウスの話と共通する——人間と神々との融和を計り成功させた最初の神々のうちの一柱であり、神々自らが人間たちに警戒心を起こさせずに、神々の実在を知らしめた神的なるものたちの預言の本体だったということになる。

## 6. キリスト

ヘルダーリン詩の神話的世界の中のキリストは、西欧世界一般のキリスト教神学上のキリスト像とは本質的部分でまったく異なり、大地や自然やエムペドクレスなどの〈神的なるもの〉たち、半神ヘラクレス、神々の中の特殊な神バックス（ディオニュソス）の系譜に連なる〈神々と人間との仲介者、融和者、預言者〉というような性格を有している。ヘルダーリン詩におけるキリスト像は、バックス（ディオニュソス）に非常に似通っていて、神（神々）の子でありキリスト自身も神（神々の中の一神）である。そして神々の中の一神が人間の世界に人間として現れ、神々と人間との仲介者、融和者、預言者となって神々不在の時代に神々の到来を告知し、神々の啓示をする。この時キリストはバックス（ディオニュソス）とは異なり酩酊や陶酔による我を忘れた人間たちをコントロールし、神々を認知させるのではなく、醒めた酔っていない（nüchtern）状態で人間たちと相対している。神々の啓示をするために現れたキリストは、しかしながら、人間界で神（神々）の姿に自らが戻ることを自ら禁じているものと考えられる。

このことに関しては、キリスト自身が自らの判断で自ら禁止しているのか、キリストの父、絶対唯一神がそうさせているのかは問わないことにしたい。どちらにしても絶対唯一神の意志に対して我々は口を噤むべきものであろうからであるが、決着するところは同じであるとも言える。すなわち、絶対唯一神の意志というのはすべてに及ぶものだからであり、キリストの意

志はキリストの意志であって、それがもっと上の絶対唯一神の大いなる大宇宙の意志ということに連なるのであれば、絶対唯一神に関しては起こることの原因はすべて唯一神に帰するのであり、また起こらないことの理由もすべて絶対唯一神に起因するという論理的帰結になるからである。

さて、このようにして、本来神（神々）であるキリストは、自らの意志で人間界において、人間であることを頑なに守るという行動をとったのであり、これは死すべき身の人間たちに、キリストを人間だと信じ込ませるのに疑いを挟ませない状況をつくり、人間と神々との間にある深淵とも言える垣根や壁を取り払うために必要不可欠なことであった。バックスは確かに人間たちと神々との間にある垣根・壁の一端を取り払い、人間たちは、神々の一部にも人間たちに対して心を開き、人間たちと親密にしたいという神々が少数はいることを確信できた。しかし、大部分の神々はそうではなかったのである。それは仕方のないことであった。そして陶酔状態の人間たちはその陶酔状態が覚めれば正気に戻るのである。かくして最終的に神々の側からの切り札として遣わされ送り込まれたのがキリストだったのである。そして、キリストがほぼ完璧に人間を演じきったために、「自分は神の子」である、「自分は神」であると言ったことが、エムペドクレスの場合と同様にヒュブリスの罪を犯すことになったのである。キリスト自身が救済しようとした人間たちの手によってキリスト自身の処刑が実行される。エムペドクレスの場合は、勿論エムペドクレス自身正真正銘人間であり、預言者ではあっても神（神々）ではなかった。彼は神々の支持、神々の後ろ楯があつてはじめて神的なるものとなっていたのであり、その意味でキリストとは本質的部分でまったく異なっていた。しかし、そのエムペドクレスでさえ、民衆に、人間に殺されたのではなかった。彼はヒュブリスの罪を償うために、そして彼の生涯をかけた最大の使命を果たすために、エトナ火口に身を投げ自らの生命を絶った。



そのことによって、かえって神々到来の預言、神々の啓示を大地・自然の中でやり遂げることができたのである。エムペドクレスは自らの罪を人間として自ら贖罪できたのである。

翻ってヘルダーリン詩におけるキリストは、本来神の子（神々の中の一神）であるので嘘を言っているわけではないし、また、真実神（神々）なのでヒュプリスの罪を犯しているわけでもない。むしろ現世で頑なに人間として立ち居振る舞い、人間の殻の中で行動してきたために、あるいは自らに人間界において人間であることを課したために、結果的に嘘つき、神（神々）でもないのに神だと口に出して言うヒュプリスの大罪を犯した大罪人ということになってしまった。人間の姿でありつづけることによって、最も人間たちに寄り添うことができ、人間たちの気持ちや心を理解できる神（神々）となっていたキリストは、それゆえに、かえってキリストの言う神々の到来、神々の実在の預言に疑問を抱く者たちやそれを否定する多くの人間たちにとっては、神々に刃向かう恐るべき神（神々）の冒瀆者と映って見えたのであろう。繰り返すが、キリストはヘルダーリンの詩的世界において、エムペドクレスのように神々の助力、援助によって〈神的なもの〉になったのではなく、本来はバックスのように、神（神々の一員）として人間に接することもできる〈神的なもの〉を越えた神（神々）だったのであるが、彼はバックスのやり方とは異なり、現世において神（神々）として出現するのではなく、ただただ人間の姿を保持して生きていこうと決心しそれを実行したのである。キリストのこのやり方は人間の心の深奥に迫っていくことができ、神々の実在を知らしめる預言者としての能力を最大限に発揮することができた。そして嘘偽りなく自らを神の子であると言ったキリストは、一部の信者である人間には神々の到来を告げる預言者の最高の体現者であった。しかし、そのことが人間界におけるキリストの破滅を胚胎していた。神（神々）であるキリストはこのことも予めわかっていたことは確かであったが、

実際にそれが人間たちによってなされ、実現することを経験する必要があった。それは自らが犠牲になることによって、人間が神であるキリスト自身を殺そうとし、殺した事実であり、それは人間の大罪（あるいは原罪とも言える）であるが、同時に、人間であるキリストが犠牲となって死ぬことで—— 勿論現象としては殺されているのだが—— 神（神々）を最大限冒瀆した人間たちの罪の償いをしたとも言える。それゆえ、キリストの死は、神（神々）への冒瀆と贖罪が同時に二重に行われた稀有なケースであり、それによって、人間たちは自らの神（神々）への信仰の欠如を自覚的に確信し、揺るぎない神々への信仰に向かうことになるのである。

キリストの死は神（神々）への冒瀆と贖罪が二重になって同時に行われた象徴的出来事であった。それは人間界（現世）で人間として神性の啓示という自らの使命を全うして生涯を終えた人間キリストと人間たちによって殺害（処刑）された神キリストという二面性を持つ。ここで注目すべき重要なことは、人間界で人間であったキリストが自らの生命を犠牲にして罪を償ったということである。神であるキリストが自分の生命をかけて人間の罪を償ったという事実は、〈物乞い〉〈乞食〉というキリストの本質を言い表している。ヘルダーリン詩の神話世界において、キリストは神々の中の一神（一柱）である。そのキリストが人間界において人間の姿でいつづけるという行いが、神々の側から見れば、最下層の人間界に身を落としているということになる。単に衣装や姿がみすばらしく、物乞いして歩くキリストというイメージからくるのではなく、本質的に Bettler なのである。神自らが、自らの身体を捧げ出して、人間界で人間として自身の生命を捧げて神々への贖罪を乞うているのは、まさに Bettler（物乞い、乞食）そのものにほかならない。ヘルダーリンの詩的世界において、最も高貴で神聖な種族神々の一員が最下層の種族死すべき身の人間に身をやつして、しかも神であるキリストが人間によって処刑されたということは、キリストがその当人

としても、神々への最大の冒瀆にほかならない。しかし、翻って、それだからこそ、キリスト自身が人間として自らの生命を捧げ、犠牲に供することによって神々の赦しを乞うている、人間たちの罪の赦しをお願いしている意味があるのである。もう一度状況を詳しく述べれば、最上層に位置する最も高貴な神々の一神（一柱）が、最下層に属する（神々の眼から見て）最も卑しい人間に身をやつし、その人間たちに神々の啓示を試み、挙句の果てに殺されてしまうという一連の事象の流れの中で——神々の一柱であるキリストはこの時系列の出来事を予め把握できていたのであるが——敢えて自分が犠牲になることで、すなわち、神であるキリストが Bettler のような惨めな姿で最悪の状況に陥ることによって——神（神々）にとってこれ以上の屈辱はないという仕方で死に至っている——神々にこれだけの最悪の悲惨な状態に神であるキリストが遭遇して人間たちの犯した罪の赦しを乞うているのであるから、聞き入れてくれ、この願いを叶えてやってくれと（神々に）強く訴えているのである。神々の一神であるキリストにとってこれはとてつもない決心であり、この訴えは神々に対して大変説得力のあるものである。この一連の行為を一言で言えば、人間たちに対する〈愛〉から来ているものと言えるかもしれない。ヘルダーリンの詩的世界においてキリストは神々の誰よりも人間たちのことを知っている神なのであるから。

さて、キリストの貴重な死だけでは実は人間たちは神々の啓示や神々の信仰をそう容易には受けつけないはずであるが、キリストは、エムペドクレスやバックスと異なり、人間として亡くなってから再生したのであり、これが人間たちに神々を信じさせる最大の効果をあげることになった。人間たちは、間違いなくキリストが完全に人間として、人間だから亡くなったと思い込んだ。しかし、死後、本来は神（神々）であったキリストは死から蘇り、再生し、人間たちの前に姿を見せ、神々の啓示をなし、自ら神（神々）であることを示し、天上界に昇って行

ったのであり、神々のもとへ戻って行ったのである。エムペドクレスの場合と異なり、キリストのこの再生の行為は、人間たちに神々への信仰を確信させるのに最大の影響を与えたと言わねばならない。その意味でキリストの再生 **Wiedererstehung**こそは神自身からの最大の神性の啓示だったとすることができる。

## 結

以上述べてきたように、ヘルダーリンの〈神性の啓示者〉の系統は、エムペドクレス → ヘラクレス → バックス（ディオニュソス） → キリストとなるが、ヘラクレスの役割は存外重要である。ヘラクレスは確かに天上世界を志向し、しかし地上世界を清めるものとなったが、ヘラクレスによって、まったく別々の独立した世界が関係を持ち、接触することができるようになっていたのであって、その業績があつて、バックス（ディオニュソス）とキリストの人間界への出現が可能になったのである。この関係は歴史上の人物エムペドクレスからはじまり、神話上の英雄と神、ヘラクレスとバックス（ディオニュソス）を経て、歴史上の存在キリストに向かって連なっていくのである。<sup>24)</sup>

アポロンのようにはっきりと神々の姿を積極的に現出させる神と、バックス（ディオニュソス）のように、人間に寄り添って神々の姿をかなり消し去り、隠し、消極的にしか示さない神があり、エムペドクレスのように神的なるものからの啓示があり、キリストの例のように神自身からの啓示がある。しかし、乏しい時代（現代）にあつて、我々にとって神性を最もよく啓示するものは、歴史上の人物も伝説・神話上の登場者もすべて含んだ〈聖なる書から静かに照らす力 *Stilleuchtende Kraft aus heiliger Schrift*〉<sup>25)</sup>なのではなかろうか。

## ANMERKUNGEN

1) StA. II を基本テキストとしている。

2) 主要な後期詩群は下記の通り。

StA. II

Oden

S. 56f. Chiron

Elegien

S. 90ff. Brod und Wein. An Heinze

Einzelne Formen

S. 103ff. Der Archipelagus

S. 117 Hälfte des Lebens

Die vaterländischen Gesänge

S. 126ff. Am Quell der Donau

S. 130ff. Versöhnender der du nimmergeglaubt... *Erste Fassung*

S. 133ff. Versöhnender der du nimmergeglaubt... *Zweite Fassung*

S. 136f. Versöhnender der du nimmergeglaubt... *Dritte Fassung*

S. 142ff. Der Rhein. An Isaak von Sinclair

S. 153ff. Der Einzige. *Erste Fassung*

S. 157ff. Der Einzige. *Zweite Fassung*

S. 161ff. Der Einzige. *Dritte Fassung*

S. 165ff. Patmos. Dem Landgrafen von Homburg

S. 173ff. Patmos. *Vorstufe einer späteren Fassung*

S. 179ff. Patmos. *Bruchstücke der späteren Fassung*

S. 184ff. Patmos. *Ansätze zur letzten Fassung*

S. 188f. Andenken

S. 190ff. Der Ister

S. 193f. Mnemosyne. *Erste Fassung*

S. 195f. Mnemosyne. *Zweite Fassung*

S. 197f. Mnemosyne. *Dritte Fassung*

Hymnische Entwürfe

S. 202f. Deutscher Gesang

S. 204 Wie Vögel langsam ziehn...

S. 217ff. Die Titanen

S. 220f. Einst hab ich die Muse gefragt...

S. 222ff. Wenn aber die Himmlischen...

3) 1800 年から 1803 年にかけて作られた後期詩群（Späte Gedichte）の主要テーマを論述していく際の前提条件として、1997 年から 1999 年ごろにかけて書かれた未完の三つの劇詩稿やそれに関係する論文等作品「エムペドクレスの死」の中のエムペドクレスは先行する重要な論述

テーマである。

4) StA. II. S. 190ff. Der Ister を念頭において論じているが、ここでは大河を一般化している。

5) StA. II. S. 142ff. Der Rhein 参照。

6) StA. II. S. 188f. Andenken 参照。

7) 川は天と地を結びつけ、海に注ぎ込む前に大地を通り大地に恵みを与えつづける。勿論水害などの災害を引き起こすこともあるが。川の水は通常下記のように循環する。

天 天上のものたち

↓ 雨

川の源泉 高山

↓

山腹 山の低い部分 谷

↓

平野 町・都市

↓

大洋（海）

↓ 水蒸気

天空

8) たとえば、ヘルダーリンの作品においては、「泉」は大地の中（奥）からの知らせを表し、喜び（プラス）の知らせの可能性が高い。

9) Kocziszky(2009) S.121.

10) 〈森〉や〈山〉や〈湖〉や〈川〉や〈野〉や〈谷〉や〈林〉や〈大地〉などの自然が神性を有している場合があり、その場合、〈森〉や〈山〉や〈川〉などが弱い光を有している存在となる。必ずしも上記の〈森〉や〈山〉や〈湖〉や〈川〉や〈野〉が神性を内に秘めているのではなく、あくまで神々が近在するか内在してはじめて〈大地〉や〈自然〉は中程度の神的光を内包し、得ることができるのであり、神々が〈大地〉や〈自然〉から離れてしまえば〈森〉や〈山〉や〈湖〉は弱い光しか有さない存在でしかない。強く激しい光を有する神々を直接受け入れることのできない死すべき身にものたちは、この自然や大地の中の神的なるものたちのベール（カバー）のもとで神々と間接的に相対することができるのである。また、同じ〈森〉や〈山〉や〈谷〉や〈畑〉などであっても、神々の近在、光の放射がなければ神聖な存在とはなりえないのであって、神々の到来により、その場その場の大地や自然の存在物が神的光を受ける（浴びる）ことになる。しかしながら、神的なる

ものたちは神々不在の場合でも、弱い光を保持する能力は持ち合わせているのであり、人間はその弱い神聖な光に耐えられるようになってようやく中程度の程よい光の束に耐えうる存在となる。

- 11) アポロンに代表される烈しい光の栄光ある時代からディオニュソス（バックス）に代表される光の乏しい時代（現代）に移る際は、聖なる文書も神的なるものの一つとして人間たちを神々の光に慣れさせる役目を果たしている。
- 12) Hybris（神に対する不遜、増上慢）
- 13) StA. II. S. 171
- 14) 小林（1986）参照。
- 15) StA. II. S. 224
- 16) StA. II. S. 164
- 17) ヘラクレスの 12 の難事
  - (1) ネメアのライオン退治
  - (2) 水蛇ヒュドラ退治
  - (3) ケリュネイアの鹿の捕獲
  - (4) エリュマントスの猪の捕獲
  - (5) アウゲイアスの家畜小屋の清掃
  - (6) 怪鳥スチュンバリデスの退治
  - (7) クレタの牡牛の捕獲
  - (8) ディオメデスの人食い馬の捕獲
  - (9) アマゾンの女王ヒッポリュテの帯の入手
  - (10) ゲリュオンの牛の捕獲
  - (11) ヘスペリデスの園の黄金のりんごの入手
  - (12) 地獄の番犬ケルベロスの捕獲
 エヴスリン(1979)とグラント／ヘイゼル(1990) 参照。
- 18) 一例として、ゼウスの命を無視して、プロメテウスを救い出した話がある。  
エヴスリン(1979)とグラント／ヘイゼル(1990) 参照。
- 19) 〈清め〉をしなければ、すなわち〈汚れ〉〈穢れ〉を取り除かなければ、神的なるもの、神々の再来、到来はありえない。神々は純粋で清らかなところにしか出現しないからである。神聖な場所が必要であり、それを用意するためには、犠牲を払うか、または、歌を歌って清めることも可能である。聖なる言葉を発することであたりを清めていくのである。  
StA. II. S. 171
- 20) このほかにプロメテウスや新約聖書のヨハネの名を挙げることができる。

StA. II. S. 167f

- 21) ディオニュソスもバックスも神話上同一の神と正しい存在なのであるが、ここでは、誕生時の母の死にまつわるマイナスイメージの大小が、詩人ヘルダーリンの生きている時代より、より近いローマ神話と、より遠いギリシア神話の遠近の違いからくるものとみなされている。端的に言えば、詩人ヘルダーリン自身の詩的感覚、時の感じ方のニュアンスが反映されていると考えることができる。
- 22) バックス（ディオニュソス）神には葡萄酒（飲み物）と歌（言葉）が伴うのが常であるが、二つとも清めるための手段となるものであり、神的光（弱い光）を内包していると考えられる。
- 23) ディオニュソス（バックス）のライバルアポロンを讃美したために、ディオニュソス（バックス）の信奉者たちによって身体を八つ裂きにされた。  
エヴスリン(1979)とグラント／ヘイゼル(1990) 参照。
- 24) ヘラクレスとバックス（ディオニュソス）とキリストを論述する際に特に下記の詩が重要であった。  
StA. II. S. 153ff. Der Einzige. Erste Fassung  
StA. II. S. 157ff. Der Einzige. Zweite Fassung  
StA. II. S. 161ff. Der Einzige. Dritte Fassung  
StA. II. S. 190ff. Der Ister  
StA. II. S. 220f. Einst hab ich die Muse gefragt...  
StA. II. S. 222ff. Wenn aber die Himmlischen...
- 25) StA. II. S. 164  
この聖なる書には、ギリシア神話もローマ神話も聖書も他の書物も含まれているものと考えられる。

## LITERATURVERZEICHNIS

### TEXT

- 1) Hölderlin : Werke und Briefe, hrsg. von Friedrich Beißner und Jochen Schmidt. Frankfurt am Main 1969.
- 2) Hölderlin : Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe. (StA.) 8 Bde. in 15 Teilbänden, hrsg. von Friedrich Beißner und Adolf Beck. Stuttgart 1943-1985.
- 3) Hölderlin : Sämtliche Werke. Kritische Textausgabe. (KTA.) 20 Bde., hrsg. von D. E. Sattler u.a. Frankfurt am Main 1975-2008.
- 4) Hölderlin : Gesammelte Werke, hrsg. von Hans Jürgen Balmes.

Frankfurt am Main 2008.

- 5) 手塚富雄・浅井昌男他訳：ヘルダーリン全集〔全4巻〕  
（河出書房新社）1973.

LITERATUR

- 1) Alt, Peter-André : Subjektivierung, Ritual, implizite Theatralität. Hölderlins 'Empedokles'-Projekt und die Diskussion des antiken Opferbegriffs im 18. Jahrhundert, in: Hölderlin- Jahrbuch 37 (2010-11), S.30-67.  
2) Behre, Maria : Dionysos oder die Begierde. Deutung der *Weisheit der Alten* bei Bacon, Hamann und Hölderlin, in: Hölderlin- Jahrbuch 27 (1990-91), S.77-99.  
3) Binder, Wolfgang : Sprache und Wirklichkeit in Hölderlins Dichtung, in: Hölderlin- Jahrbuch 9 (1955-56), S.183-200.  
4) Böschstein, Bernhard : Hölderlins späteste Gedichte, in: Hölderlin- Jahrbuch 14 (1965-66), S.35-56.  
5) Büttler, Stefan : Natur-Ein Grundwort Hölderlins, in: Hölderlin- Jahrbuch 26 (1988-89), S.224-247.  
6) Dilthey, Wilhelm : Das Erlebnis und die Dichtung. Lessing-Goethe- Novalis-Hölderlin. Göttingen 1970. S.242-317. u. S.326f.  
7) Frank, Manfred : Hölderlin über den Mythos, in: Hölderlin- Jahrbuch 27 (1990-91), S.1-31.  
8) Gehmann, Michel : Bereit an übrigen Orte. Irritationen und Initiationen zu Hölderlins mythopoetischen Zyklus der *Nachtgesänge*. Würzburg 2009.  
9) Gilby, William : Das Bild des Feuers bei Hölderlin. Bonn 1973.  
10) Groddeck, Wolfram : Die Nacht. Überlegungen zur Lektüre der späten Gestalt von *Brod und Wein*, in: Hölderlin- Jahrbuch 21 (1978-79), S.206-224.  
11) Guardini, Romano : Hölderlin. Weltbild und Frömmigkeit. München 1955.  
12) Hamlin, Cyrus : Die Poetik des Gedächtnisses. Aus einem Gespräch über Hölderlins 'Andenken', in: Hölderlin- Jahrbuch 24 (1984-85), S.119-138.  
13) Harrison, Robin : *Das Rettende oder Gefahr?* Die Bedeutung des Gedächtnisses in Hölderlins Hymne *Mnemosyne*, in: Hölderlin- Jahrbuch 24 (1984-85), S.195-206.  
14) Heidegger, Martin : Hölderlins Erde und Himmel, in: Hölderlin-

Jahrbuch 11 (1958-60), S.274-294.

- 15) Hofmann, Gert : Dionysos Archemythos. Hölderlins transzendente Poesis. Tübingen 1996.  
16) Hom, Peter : Im Liebe wehet ihr Geist. Hölderlins späte Hymnen. Oberhausen 2012.  
17) Ilgner, Ines : *Von Erinnerung erhebt*. Zu Hölderlins Geschichtsbild in seinem Gedicht 'Der Archipelagus', in: Hölderlin- Jahrbuch 25 (1986-87), S.155-175.  
18) Kocziszky, Eva : Hölderlins Orient. Würzburg 2009.  
19) Kommerell, Max u.a. : Über Hölderlin. Transzendente Reflexion der Poesie. Frankfurt am Main 1970.  
20) Kreutzer, Johann (Hrsg.) : Hölderlin-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart 2011.  
21) Malsch, Wilfried : Geschichte und göttliche Welt in Hölderlins Dichtung, in: Hölderlin- Jahrbuch 16 (1969-70), S.38-59.  
22) Schmidt, Jochen : Die innere Einheit von Hölderlins 'Friedensfeier', in: Hölderlin- Jahrbuch 14 (1965-66), S.125-175.  
23) Schmidt, Jochen : Zur Funktion synkretistischer Mythologie in Hölderlins Dichtung 'Der Einzige' (Erste Fassung), in: Hölderlin- Jahrbuch 25 (1986-87), S.176-212.  
24) Stierle, Karl-Heinz : Dichtung und Auftrag. Die innere Einheit von Hölderlins 'Patmos'-Hymne, in: Hölderlin- Jahrbuch 22 (1980-81), S.47-68.  
25) Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin 1. Teil : Die Gedichte, hrsg. von W. Landers, H. Schanze und H. Schwerte. Tübingen 1983.  
26) バーナード・エヴスリン, 小林稔訳：ギリシア神話小事典（社会思想社、1979）  
27) マイケル・グラント／ジョン・ヘイゼル, 西田実・入江和生・木宮直二ほか訳：ギリシア・ローマ神話事典（大修館書店、1990）  
28) マルティン・ハイデッガー, 三木正之 / アルフレード・グッツオーニ訳：ヘルダーリンに寄せて〔ハイデッガー全集 第75巻〕（創文社）2003.  
29) 小林繁吉：ヘルダーリンの「エムペドクレスの死」考—— 神的エムペドクレスの聖なる死 ——（八戸工業大学紀要 第5巻）1986. S.139-145.  
30) 手塚富雄：ヘルダーリン下〔手塚富雄著作集 第2巻〕（中央公論社）1981.



## 要 旨

ヘルダーリンは1800年から1803年にかけて、オード、エレギー、個々のいろいろな詩型、祖国の歌、讃歌草案を含む後期の詩群を書いた。この中で特に重要な詩は〈唯一者〉〈イースター〉〈あるとき私はムーサに……〉〈しかし天上のものたちが……〉である。

ここでは、死すべき身の人間たちと不死の神々との間の仲介者、融和者としての、また、神性の預言者および啓示者としての神的なるものと神々が問題になる。論述する神的なるものと神々は、以下の通り、川、大地、自然、エムペドクレス、ヘラクレス、バックス（ディオニュソス）、キリストである。神的なるものは、川、大地、自然、エムペドクレスで、ヘラクレスは半神、バックス（ディオニュソス）、キリストは神々に属する。

**キーワード：**神的なるもの、神々、大地、ヘラクレス、キリスト